

第6章 まとめ

第5章では、県立広島大学の秋山伸隆名誉教授による講演－『佐伯区に伝わる「あまんじゃく伝説」の時代背景を探る』－についてご紹介しました。

江戸時代などの文献を基に、「佐伯区にあまんじゃく伝説は、元々は『道空・長者伝説』と『あまんじゃく伝説』という、別々の伝説がいつの時代かに合体したのではないか、その成立時期は明治以降ではないか」との教授の説は斬新で大変驚かされました。当日、聴講された方々、また、読者の皆様はどのような感想を持たれたのでしょうか。

1 筆者は、講演内容及び引用文献を読みなおし、次のように考えました。

(1) 合体説について

- ① 江戸時代の『芸備国郡志』(1663)、『厳島道芝記』(1702)、『芸藩通志』(1825)、『厳島図会』(1842)など、17世紀後半から19世紀中盤の地誌類には、いずれも「道空が(宮島沖で得た砂金の)富で厳島神社を修復した」旨の記述がありますが、「あまんじゃくな子どもとその父親」の話は登場しません。(このうち、『厳島道芝記』には、湯蓋家について「家続かず」とあり、ひょっとすると子孫がいなかったのではないかと推測させます。)

反対に「あまんじゃくな子どもとその父親」の話は、『秋夜長話』(1781)という、18世紀終盤の随筆・紀行文に登場するのみです。

- ② 最初から「道空・長者伝説+あまんじゃく伝説」の構成であったとすると、話の展開に若干、唐突感、意外さを覚えます。

つまり、主人公の道空は日頃から厳島神社を崇拝し、私財をもってその修復に貢献していたにもかかわらず、最期に自分の希望と真反対の所に墓所を設けられてしまうという不運、悲劇に見舞われるわけです。道空が富貴になったことから慢心し、信仰心が薄くなったなど、それなりの原因となるような出来事があれば合点がいくのですが、そのような記述はありません。

「人生万事塞翁が馬」のように、人の運・不運は容易に定め難いという教訓を示すねらいがあるのならわからないことはないが、話の前後を読む限り、そのような意図は窺えません。

- ③ ①、②を考え合わせると、教授の説、つまり、「道空・長者伝説」と「あまんじゃく伝説」という、別々の伝説がいつの時代かに合体したのではないかという説には肯けるところがあります。

仮に、元々は「道空・長者伝説」であったところに「あまんじゃく伝説」が付け加えられたとすると、それを着想した人物は、瀬戸内海に浮かぶ島にある墓、そして墓

石が海中に沈み、台石だけ残る様を見聞きして、第4章の中国の古典の「昆明池の中の塚」あるいは「洪水で一部は水中に没してしまった、渚の洲の中の石塚」を思い浮かべ、結び付けたわけでしょうから、漢籍の素養が深く、着想力・想像力が豊かな人だったように思います。

ところで、先の『芸備国郡志』の編さん者は黒川“道裕”という方です。あまんじゃく伝説の湯蓋“道裕”と同名であり、面白い一致ですね。

(2) 伝説の成立時期について

- ① 教授は、「五海市村治績調(明治43年(1910))に、現在の佐伯区のあまんじゃく伝説と同じ内容が初めて紹介されている」とし、これを基に「明治以降に二つの伝説が合体してできあがったのではないか」と述べられました。

しかし、

ア 「五海市村治績調」にあまんじゃく伝説の記載があるかどうかを確認をするため、市公文書館や市図書館に照会・調査しましたが、その原本・写しを探し当てることはできませんでした。

ただ、「五日市町誌上巻」(p192～p193。昭和58年発行)に引用されている「五海市村治績調」の内容は、「道空・長者伝説」の記載に留まっています。

イ 仮に明治以降とすると、今日から150年余り前(一世代30年とすると5世代前＝祖父母の祖父母の代)になります。

それぐらいの期間で、土地に伝説が定着するものだろうか、いささか疑問が湧きます。「イワレ」、「イイツタエ」として、土地の人々から「真実」の話として受け入れられるには少し時間が短いのではないかという気がします。

やはり、津久根島の墓を絡めた「あまんじゃくな子どもとその父親」の話が初めて登場する『秋夜長話』(1781)という随筆・紀行文が書かれた頃には、当地の人々の間で、現在の原型のような話が地誌類とは別に流布・認知され、定着していたと考えるのが自然ではないかと思うのですが、読者の皆さんはいかがでしょう。

(3) 感想

伝説は、親から子・孫へ、地域の古老から若者へ、あるいは地元の者から旅の者へ、その土地にまつわる事物のいわれを郷土の誇り、あるいはご当地自慢として、口で語られ、伝承されてきたものです。このため、最初から現在の形だったのか、あるいは後世に別のものと合体してできあがったのか、はっきり確定する術はないでしょう。

いずれにしても、単に「道空・長者伝説」であれば、今日まで人々の間で語り継がれてきたかどうかと思います。

今、佐伯区で語り継がれているあまんじゃく伝説は、神仏に対する崇拝や信仰がもた

らすご利益・ご加護といった「道空・長者伝説」だけではなく、子どもの成長、つまり、親への反発・親子の対立、子どもの自立、さらに親子間の相互理解の難しさなどを、平易にわかりやすく教えてください。いつの時代においても興味・関心の尽きない、子育ての難しさ・子どもの教育といったテーマを含んでいたからこそ、今日まで伝えられてきたのではないかと思います。

2 この連載は、令和3年5月、当公民館の職員同士の話の中での「あまんじゃく伝説は佐伯区だけのもの?」、「日本の他の地域にもあるの?」という、素朴な疑問から始まりました。

調査の中で、近海の市町（現在の江田島市や山口県周防大島町）にも同じような伝説があり、さらに日本全国に「雨蛙不孝」や「鳶不孝」といった、筋のよく似た昔話が数多くあること、お隣の韓国にも同様の昔話があることなどを初めて知りました。

寄り道をして、そもそも「あまんじゃくとは何か?」を調べてみたら、アニメで登場するバイキンマンと共通項が多かったのは意外な発見でした。

また、伝説と昔話の違いや、柳田国男が説く『伝説と昔話の相互関係』、つまり、伝説の森・草叢^{むら}の中で昔話の小鳥（旅人や留学生の伝聞情報、あるいは彼らの手紙や持ち帰った書物などでしょうか?）が巣立ち、いろいろの伝説の種子や花粉を遠くまで運び、その地で新たな伝説が誕生するという考えを学ぶことができました（柳田国男著「日本の伝説」（株角川学芸出版））。

彼の別の著作では、『伝説半径』という言葉も知りました。『伝説半径』とは、ある伝説の発祥地を中心として同一系統の伝説区域を限定できる半径のことで、“類似の物を^{あつ}蒐めていくとその最初の中心、発祥地が判明してくる。中心が文化地であるほど半径は長くなる。京都や大阪や江戸が発祥地であった物は大きな半径を有するわけで、書物や中国思想や仏教思想の影響が加味される”（「ささやかなる昔」（株平凡社））と記しています。佐伯区海老山周辺をあまんじゃく伝説の発祥地とすると、その伝説半径はどの範囲まで広がるのだろうかと思います。

さらに、佐伯区をあまんじゃく伝説の元ネタが中国の古典とするならば、東方以外、つまり南方のインドシナ、西域などにも同じように中国から伝播していったのでしょうか。未だにこれらの地域の「あまんじゃく伝説」を見つけていませんが、その有無、あるならばその内容、ないならば伝播しなかった理由などが気になります。

読者の方でこれらの国や地域の昔話や伝説に詳しい方がいらっしゃれば、また教えていただければ幸いです。また、今回、見つけることができなかった「五海市村治績調」などの関係資料があれば、ご提供いただければと思います。

最後に、美隅公民館では例年、秋にあまんじゃく伝説ゆかりの地である五日市南地区を

巡る「あまんじゃくウォークラリー」をはじめ、伝説がらみの行事を開催しています。それらの開催を契機としながら、今後も佐伯区のあまんじゃく伝説にまつわることを発信していきたいと思います。